
バンブーブレード～西からの赤い風～

白炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バンブーブレード～西からの赤い風～

【NZコード】

N3406D

【作者名】

白炎

【あらすじ】

すべての始まりは、ある男の金欠から始まった。市立室江高校の剣道部顧問・石田虎侍。彼の前に颯爽と現れた剣客少女、川添珠姫が剣道部に入部して運命は巡り、竹刀を手に集つた部員達はやがて幾多の試練を乗り越えて全国大会出場への道を歩んでいく青春剣道物語である！！そして、その剣道部に西からの一陣の赤い風が吹き荒れた時新たな運命が巡る。

第0話・赤髪の少年

「めーーん！！」

パシーンと乾いた音が木造で建てられた家に響く。いや、そこは家ではなく昔なら珍しくなかつた建屋、道場であった。

その道場の中では床に大の字になりながら肩で息をしている子供と、その子供の前に佇む大人の二人がいた。

互いに頭、胴、手に防具を付けており一人の表情は分からぬ。少しの沈黙の後、荒い息づかいで大の字で寝転がっている子供が声を出した。

「あー、やっぱ強いなあ椿さんは」

「なに言つてゐるの。 その歳で私に此処まで食いついてくる子なんて居ないわよ」

互いに言葉を掛け合いながらその喋り方から大人の方は女性、子供の方は少年だと言つことが解る。

だが、その女性の言葉を聞き少年はどこか拗ねたように反論する。

「ふん！ そんなお世辞はいらんわ、椿さん最後まで本気出してへんかったやん」

防具を付けたまま少年は上半身をゆっくりと持ち上げ片手に持つていた竹刀をその女性、椿に向け指摘した。

椿はそう少年に言われ少し苦笑する。

「ふふ、だつてしょうがないじゃない。私が本氣出したら勝負にならないじゃない」

椿が少年に諭すように喋り掛けるが、少年はそれでも納得がいかないのか、ぶ”とか、う”と唸つている。

「ほら、そんな所で寝そべつてないで、防具を脱ぐ。時間も時間だしね」

椿の言つ通り時間は五時を過ぎていて、外は夕暮れであった。

少年は夕暮れになつた空を見てフンと鼻を鳴らし防具を脱ぎ始めた。

面を取つた少年の顔はまだ先程のことが気に入らないのか拗ねたような顔であつたが整つた顔立ちであるためどこか可愛らしくみえ、その髪も夕日を浴びて美しく赤く輝いている。

否、その少年の髪は実際に赤かつた。

その赤い髪をくしゃくしゃと自分で搔き、椿に再び向き直つた。

「まあええわ。やけど次は負けへんからなー」

椿に指を差しながら大きな声で宣言する。

少年のその言葉を聞き、椿は微笑しながら「ええ」と頷いた。

椿は少年から道場の入口に目を向け、入口に小さな影が隠れているのに気がつき優しい声で小さな影を呼んだ。

「タマキ、隠れてないでこいつにいらっしゃい

小さな影、タマキと呼ばれた少女はトマトと一緒に近づき、つくりと口を開いた。

「リュウマくんともうあそんでいい？」

タマキはそう椿に聞くと、椿はリュウマと呼ばれた赤髪の少年に「どうする？」と聞き返す。

リュウマは先程の拗ねた態度とは全く違い、顔はパアと華が咲いたように満面の笑みを浮かべた。

「もちろんや！ 行こか、タマキ。 今日はブレードブレイバーごっこじよか！」

椿はリュウマと共に道場から出て行く我が娘、タマキを見つめながら「ククク」と頷いた。

椿はリュウマと共に道場から出て行く我が娘、タマキを見つめながら三度目の微笑を浮かべた。

「仲が良いね、あの二人は」

一人を見つめていた椿の隣から低い男性の声が聞こえ、振り向くとそこには白髪の優しい顔した男性が立っていた。

「あなた…。 ええ本当に、リュウマ君に良く懷いて」

「だが、もつ少しだったか？ 彼が引っ越すのは…」

「ええ、大阪に…。 タマキは寂しがるでしょうけど」

悲しそうな顔を浮かべる椿を見やり、タマキの父は微笑していた。

「タマキだけかい？ 私から見たら、君も随分リュウマ君に入れ込んでるみたいだが」

椿は夫のその言葉を聞き苦笑しながら頷いていた。

「そう……ね、確かにあの子は久々に鍛え概のある子だったわ。剣道の才能も、もしかしたら私異常かも……」

「ほつー！」

タマキの父は驚いた。なにしろ自分以上の才能を持つ椿が、リュウマを自分以上の才能があると言いつてゐるのだから。

「それに向より彼は、他の人よりも集中力がある。それがリュウマ君の武器」

「では、将来が楽しみだな。椿が言つぐらいなのだからね」

「ええ、でもそれは彼次第だけど」

「ああ……そうだね……」

川添夫婦は、共に我が娘タマキと赤髪の少年リュウマを見つめながら微笑んでいた。

空は夕暮れからなお薄暗くなり、一番星が輝いていた。

第1話・不幸の連続（前書き）

第0話ではリュウマとタマキの小さい頃の話でしたが、今回からは原作と同じ高校生になつたリュウマ達のお話です。それを踏まえてお読み下さい。

第1話・不幸の連続

雲一つない空の下、一台のバイクが太陽の陽射しを受けシルバーのボディを輝かせながら黒いライダースーツに身を包んだ青年を乗せ道路を疾走していた。

バイクはゆっくりとスピードを落として路肩に寄せて止まった。止まると、バイクに乗っていた青年はヘルメットを脱ぎ溜め息を吐いた。

ヘルメットを脱いだ青年の髪は赤く、太陽の陽光により輝いている。

赤髪の青年、いや成長した龍真^(リョウマ)は顔を空に向け大きく息を吸い天に叫んだ。

そう、ただ一言だけ。

「迷つた……！」

現在、龍真は迷子中。一、二時間ほど……。

普通なら、道端でいきなり叫んだりすれば変人扱いであるが、幸いここはあまり人が通らないのか現在は人一人いない。

そのおかげで、龍真は変人と言つ称号を得ずに済んだ。

しかし、当の本人の龍真はそんなことなど気にした風もなく地図を取り出して、バイクから降り辺りを見渡した。

「おつかしいなあ～？ 何で？ 何で着けへんねん」

ガシガシと自身の頭を搔き、地図を広げながら首を傾ぐ龍真。すると、地図の間から小さく折りたたんだ一枚の紙が音もなくヒラヒラと地面に落ちた。

「ん？」

落ちた紙に気付いた龍真は身を屈めその紙を取り、小さく折りたたんでいたためその紙を広げ始めた。

「何や？ こなんといつ挟まつ……た…………」

紙を広げた瞬間、龍真の思考がフリーズした。それも綺麗に、まるで彫刻のようにピクリとも動かない。

思考がフリーズしてどれくらい時間が経過したか、ハツとして思考が一気に頭の中で加速し始めもう一度その紙を凝視した。それはもう、その紙が龍真の視線で穴が開くのではと思うくらいにジーツと。

そして、紙から視線を離した龍真は顔を俯かせ体全体をブルブルと震わせていたが、龍真はバツと顔を上げ再び天に向かって叫んだ。

「あんのクソ親父いい……！ 何せらしどんねんアホ…………！」

龍真、今回一度目の叫び。

龍真は、再びその紙を見つめていた。その顔はもう怒りを通り過ぎて呆れといふ言葉が妥当だった。

「…………」

無言。

龍真は一言も言葉を発せず、先程思考がフリーズした時のように動かないでジッと紙を見つめている。

——ビキッ！——

瞬間、龍真の額に青筋が浮き上がった。

「ひだりー！ー また腹立つてきたわー！」

龍真はさう言つと、その紙を勢い良く地面に叩きつけた。

地面上に叩きつけた紙にはこう書かれていた。

『その地図、五年前のやから。これで着けたら奇跡やのー 食いもん（プリン）の恨みは恐ろしいでー。…………じゃつ、そゆことでー b y . 愛しの父よ』

一瞬、異常なまでの笑顔の親父が見えた。そして、龍真は思つた。

あ 何かムカつく

そしてまた、龍真の怒りが沸点に達した。つていうか通り過ぎた。

「ああ、確かに愛しいのう……射殺したいほどに……。つてか、まだあの時の風美堂のプリン食つてもうたこと根にもつとるんか！いくらなんでも長すぎやろ！ それに、食いもんプリン限定やんけ！ なんや（プリン）つて！ プリン強調しそぎやねん！」

右手に握り拳を作り、今この場にいない父に突っ込む龍真。

「それに、五年前の地図つて俺を迷わせる気満載やんけ！ といつよつ自分も早よ気付けや～！ 自分のアホー！」

最後には、肩でハアハアと息をしながら自分にも突っ込む始末。

次第に落ち着いてきたのか、龍真はハア～とため息をつき停めてある自身のバイクに寄りかかった。

「もういいわ。今更どない言つても仕方あらへんし、取り敢えず誰かに道でも聞いて……」

辺りを見渡す。…………誰もいない、人っ子一人、目の前を野良猫が一匹通り過ぎていぐ。しかも黒猫…………。

「誰もおらんつて……まあ黒猫が通つて不吉とかは取り敢えずスルーしどこ、これ以上突つ込んでたら身が保てへんし……」

そう自分に言い聞かせるよつて呟く龍真は、直ぐに思考を切り替え他に道を知る方法を思案した。

首を傾げ、う～んと唸りながら考えていた龍真は何か思いついたのかポンと手のひらを叩いた。

「せうやん！ 交番や！ 道に迷つた時は交番や！ 何で気付けへんかつてん」

あはははは、と笑いながら無事に解決！ みたいな顔で頬をポリポリと搔いている龍真だが一つ肝心なことを忘れていた。

そのことに気が付いたのかハツとして咳く。

「…交番の場所…知らん…」

沈んだ。ズーンと音が聞こえてきそうなくらいに、龍真は膝を折り両手と膝を地につけ重い空気を背負いながら…沈んだ。

しかし、龍真は諦めなかつた。不屈の精神で立ち上がつた！

「まだや…まだ何か方法がある。…………そいや…この地図を見れば……つて！ 五年前の地図やつたあ～！」

折れた。龍真の不屈の精神も完璧に、それはもうポツキリと。

「あかん…八方塞がりや……ああああ、どないすればええねん！？」

？

すべて手を尽くした龍真は、かなりテンパつていた。だから、後ろから近づいてくる人影に龍真は気が付かなかつた。

「ちよつと、君？」

人影が龍真に話しかけてきた。しかし、龍真はかなりテンパつて

いるため全くその声が耳に入つていません。

「ああああ！ 誰か、」の状況なんとかして〜〜〜！ お巡りせーん

半泣きになりながら助けを請う龍真。…………まあ何と言つか、ファイト！

龍真が助けを請うて いる最中、後ろにいる人影は龍真のその姿を見てどこか可哀相なものを見る目で見つめていた。

そして、人影は龍真の肩にポンと手を置き再び声をかけた。

「だ、大丈夫か？ 君？」

「へりやー！？」

テンパつて いるところへ、いきなり 声をかけられた 龍真はビクッ
と体全体を 大きく震わせ 变な声を 出してしまつた。

そして、ゆっくりと振り向いた龍真の見た先には

「へ？ お巡りさん？」

そこに立っていたのは紺色の帽子と制服を着ている中年のお巡りさんだった。

龍真は何故そこにお巡りさんがいるのか分からず少し固まっていたが、しばらくして俯きプルプルと震えながら小さく言葉を漏らした。

「か…」

「君?」

「神様ありがとーう………」

龍真、これまでの中で一番の叫びをあげた。心の底から…。

龍真の叫びを聞いた中年のお巡りさんは、ビクッと一度身を震わせ一歩下がってしまった。

しかし、中年のお巡りさんは臆せず「まだ」「神様ありがとーう……！」と連呼して天を仰いでいる龍真へと声をかけた。

「君、ちよつと良いかね?」

「へ? あ、ああ! はいはい! すんません、一人で盛り上
がつてもうつ。」

なほは、と笑いながら頭を搔いた。

「まあ、別に良いんだけどね。そんなことよりもね、やつやこの辺りの住民の人から通報したがあつてね」

そう龍真に告げると、中年のお巡りさんはポケットから警察手帳を取り出しパラパラとめくら始めた。

「通報?ですか?」

「さう、通報。なんでも家の外の道路で大声で叫んでいる人がいるそうなんだけね」

「へえ～、迷惑な人もおるもんですね」

龍真は、うんうんと頭の縦にふり領いている。

「で、その人物の特徴だけね、身長は大体一八五センチ……

「ほうほう、自分と回じくらいでですね」

「関西弁を使つていて……」

「ムツ！ 同郷もんですか？ 関西の者として恥ずかしいですわ

龍真は、怒った顔をしながら再びうんうんと頭を縦にふり領いた。

「そして、黒いライダースーツを着た……」

…………ん？…………何か雲行き怪しくない？、と一人心の中ではぐく龍
真。

そして、その疑問を打ち払うかのようにお巡りさんは開けていた警察手帳を閉じて視線を手帳から龍真へと移し、一呼吸おいてから喋り始めた。

「……赤い髪をした青年だそうだ……」

「…………」

「…………」

沈黙。

龍真とお巡りさんの間で沈黙が流れた。しかし、その沈黙を先に破つたのは龍真からだった。

「えつと……身長が一八五センチくらい……」

その人物の特徴をゆっくりと復唱していく龍真。

「か、関西弁を使うとつて……」

その龍真の言葉に、肯定の意味を込めて頷き返すお巡りさん。

「黒いライダースーツを着た……」

俯き、自身の着ている衣服を見る。

「赤い髪をした青年……」

そして、自身の髪に手を振れる龍真。

ゆづくつと龍真は目をつぶり、冷や汗を流しながらウーンと唸りながら首を傾げていたが、ゆづくつと目を開き自身を指差しながら呟いた。

「…………俺?…………」

お巡りさんは、先程よりも深く頷いた。

「…………」

「…………」

再び二人の間に沈黙が流れた。先程は、龍真から喋り始めたが今回はお巡りさんの方が先だった。

「まあ、とりあえず詳しいことは交番のほうで聞いつか?」

お巡りさんは、龍真の手をとり歩き始めた。

「へ? あつ! ちょっと待って!」

少し抵抗しようとする龍真だが、先程の叫び声ことひともなく身に覚えがあるため強く抵抗出来ない。そして結局…。

「来なさい。」

「はー、はー……」

お巡りさんの笑顔と言ひ名の威圧に負け龍真は交番へと向かつた。

「何や、この展開は〜! ?

最後に、龍真の叫びだけがその場に響いた。

そして、当初とは違ひ形で交番の場所を知る龍真であった。

「シユウシヨウサマテス。」

「ひー、作者お前謝る『ゼロやー』。」

.....。

「だんまりかー！」

チャンチャン

「チャンチャン つやないわー！」

第1話・不幸の連続（後書き）

えへ、思わぬハプニングでリュウマがお巡りさんに連れていかれたわけですが……まつ！面白そ�だからいつか

「めちやくちやく作為的やろがあーー！」

あ、
まだいたの？

では、次回もリュウマの不幸をお楽しみ下さい

「続くか〜！？」

第2話・到着！川添道場！出発！室江高校！（前書き）

一月中に仕上げる予定が二月に…急いで仕上げたので変な所もあるかもですが、それでも良ければお読み下さい。

第2話・到着！川添道場！出発！室江高校！

リュウマがお巡りさんに連れていかれた時間より少し戻つて朝、場所はある道場。道場の名は川添道場。

そこの一 人娘、川添珠姫は久しぶりに夢を見た。懐かしい夢だつた。幼い頃の、母に道場で剣道を教えてもらつていた頃の夢。

そこには、幼い頃の自分と、笑顔で竹刀を振るう母・椿。そんな母に必死に一本を取ろうと竹刀を振り上げる赤い髪の少年の姿があつた。

タマキ自身、その光景は朧げにだが覚えていた。ただ、その少年の顔と名前だけがよく思い出せない。

いつの間にか稽古が終わつたのかその少年が自分に近づいて來ていたが、後ろからの夕陽が眩しくよく顔が見えない。自分の真正面に立つた赤髪の少年はゆつくりとタマキの方へと手を上げ、タマキの頭をふわりと撫でた。優しく、温かい撫で方だと見ているだけでも分かつた。

何処かくすぐつたくなり、自然と顔を上げたタマキは少年の口元が見え笑みを浮かべているのが陽が陰つてきたおかげで分かつた。その笑みもまた、優しさと温かさが滲み出ていてタマキはただじつとその笑みに見入つてしまつていた。そして何を考えるでもなく見つめていると、そのままゆつくりと視界がぼやけタマキは夢から覚めていった。

「……誰だつたっけ？」

そう呟きながらタマキは、朝食を食べながら今朝見た夢を思い返していた。しかし、考へても一向に思い出す事が出来ずまあいいやと、心の中で思い朝食を再び食べ始めた。

「どうかしたのかい？ タマキ」

ふと、タマキが箸を進ませようとした時心配そうな声で喋りかけてくる男性がいた。それは、タマキの正面に座り同じく朝食を食べていたタマキの父であった。

「箸が進んでいなかつたのでな、どうかしたのかい？」

氣遣つぱつにタマキの父は、自身の箸を置きタマキに再び聞き返していた。

「あ、ううん。別に何でもないです。ただ考え事してただけだし…

…

タマキがそつそつと父はホツと息づき「そ、そつか」と安堵していた。

一人は食事をする間も互いに一言も会話をせず、時計の秒針が進む音と鳥の鳴き声だけが寂しく聞こえてきていた。この空氣に耐え

切れなくなつたのか、タマキの父はゆきと口を開けタマキに譲りかけた。

「そ、そだタマキ、昨日の晩の話だが……」

「はい? ……」

唐突に話しつけられたタマキは、返事はしたもの何の話なのか分からず頭に疑問符を浮かべていた。

「昨日の晩、話しただろ? 学校では剣道部に入らないのか?、と」

「あ、はい」

タマキは思い出したのか小さく頷き肯定を表した。しかしタマキは何故また同じことを聞いてくるのか分からず不思議そうに聞き返した。

「昨日も言いましたが、家で毎日やつてこむのじやつして入るんですか?」

「ん……学校の方が家とは違つて同世代の子達がたくさんいるだらうし、それに……楽しにそきつと」

「……楽しい?」

味噌汁を啜りながらタマキの父はそつ言つが、タマキ自身は楽しいというのがイマイチ分からぬ。剣道は家でのお手伝い的に考えてくるタマキにとっては家以外で何故剣道をしなければならないの

か、そして何故同世代の子達と剣道をすると楽しいのか、考えてみるやはり分からなかつた。

「……？」

「まあ、…………いい。それよりもタマキ、そろそろ学校の時間ではないのか？」

タマキは時計を見ると、確かにいつも学校に行く時間だつた。

「あ、はい。」さりげなくまでもした

椅子から立ち上がり、鞄を取ったタマキは少し父に振り向き「それでは行つてきます」と言い残し玄関へと向かつていつた。

タマキを見送つた父は、小さく溜息を漏らしていた。

「…………昨日と似た会話になつてしまつた。母さん……年頃の娘との会話は難しいな」

再び溜息をつくタマキの父だが、その時今の暗い空気を断ち切るよつこフルルルル…と、電話独特の電子音が響いた。

「ん…、電話か」

そう言つてタマキの父は立ち上がり電話の方へと向かい、受話器を取つた。

「はい、川添ですが……！ ああ久しぶりだな。元気だつたか？」

知り合いからなのか、先程の暗い空気とは明らかに違い、心底嬉しそうにタマキの父は喋っていた。

「ああ……えつ！……そうなのか、またそれは大変だな。……何？リュウマ君が？……別に私は構わないが……分かった……ああ……じゃあ……」

ガチャヤ、と音をたてて受話器を置いたタマキの父は先程の会話を思い出しながら少し苦笑していた。

「大変だな、リュウマ君も……」

今この場にはいないリュウマにて、同情の色が隠せないタマキ父であつた。

「ふむ……遅いな、リュウマ君は」

お皿が過ぎて現在午後一時を回っていた頃、タマキ父は道場の入口に立っていた。

「電話で聞いた時間を大分過ぎているが…」

一人咳きながら辺りを見渡すがそれらしい姿は見えなかつた。タマキ父は少し困り顔をしていると後ろから声を掛けられた。

「あれ？　どうなされたんですか？　川添さん」

その声に振り向くとそこには、剣道具を担いだ中年のおじさんが立つていた。

「ああ、どうも坂口わん。どうしたんですか？　今日はいつもより早いようですが」

少し驚きながら、突然現れた坂口さんと呼ばれた中年のおじさんにタマキ父は聞き返していた。

「いや、配達が早く終わつてしまつたのでそのまま車で来たんですね」

坂口さんは笑いながら、人差し指をたて後ろを指差した。そこには、坂口剣道具店と描かれたミニバンが止まつていた。

「で、なにされてるんですか？」

再び疑問そうに坂口さんに聞かれたタマキ父は困った顔に戻り事情を話し始めた。

「いや、実は今日知り合いの子が二つちに来るんですがね…」

「はあ、だから外で二つして待つていると…」

剣道具を地面に置きながら坂口さんは軽く頭を振った。
だが、タマキ父は首を横に振った。

「いや、予定の時間も一時間も過ぎても姿を見せないので心配になつてね

「一時間もですか。それは確かに心配になりますね」

坂口さんは、うへんと唸りながら考へていたがなにか思い付いたのか声をあげた。

「その子の特徴とかないんですか？ もしかしたら配達の途中で見かけてるかもしれませんし」

坂口さんの言葉を聞き次はタマキ父がうへんと唸ついていた。

「特徴…ですか、そうですね…その子と会つのは十年以上経つていいから今はどうかわからんが昔と変わつていなければ……赤い髪が特徴的な男の子だったね」

「あ、赤い髪ですか」

赤い髪と聞いて少し困惑氣味になる坂口さん。その表情を見てタマキ父は苦笑した。

「不良とかじゃないですよ。まあ、少し変わつた子ではあったが素直で良い子でしたよ」

タマキ父に、さう促され坂口さんは安堵した顔になつた。

「そ、そうですか。でも赤い髪ですか…そんな目立つ色してたら大分分かりやすいと思いますが見てないですね」

「そうですかと、少しは期待していたのかタマキ父は小さく溜息をはいた。

「まあ、気長に待つしかないですかね」

「や、そうですね、待つのも大事ですしね。はっはっはっ！」

坂口さんは場を明るくしようと大きく笑った。

「はっはっは…………」

しかし、坂口さんは笑いをピタリと止めて目を見開き固まっていた。それを見たタマキ父は不思議そうに聞いた。

「……？　どうしました？　坂口さん」

「確かに、その子の特徴って赤い髪……でした……よね」

「え？　ええ、そうですが…」

そう言つと、坂口さんは人差し指を立ててタマキ父の後ろを指差していた。その指差す方へと振り向くとその先には、何故かにこやかにお巡りさんと一緒に歩きながらバイクを押して来る赤髪の青年、リュウマがいた。

「ん？　あ！　先生～！！」

お巡りさんと楽しそうに喋つてたリュウマは「けりに気が付いたのか、片手を上げてブンブンと大きく振つていた。

「いやー、久しぶりです！ 先生」

タマキ父の前まで来たリュウマはバイクを傍らに止め、笑顔で喋つてきた。

「お、大きくなつたねリュウマ君」

「まあ、もつ自分今年で高一やし、当然つすわ」

はつはつはつと、笑いながら頭を搔いているリュウマを見てタマキ父は、予想以上に成長して大きくなつていたことも驚いていたが、現在疑問だつことを聞いてみることにした。

「し、しかし予定の時間を大分過ぎていいが何かあつたのかい？」

タマキ父がそう聞くや否や、リュウマの笑いがピタリと止まつた。そして正面を向いていたリュウマの顔が段々下を向いていき、明るかつた顔がいつの間にか残業続々で疲れきつた中年サラリーマンのような顔になつていた。

「いや……まあ……いろいろと……狡猾な罠にハマつたと言つかなんと言つか……」

極めつけには地面にのの字を書きながらハハハッと乾いた笑いを漏らしていた。その話は触れてはいけないものだと悟つたタマキ父は咄嗟に、目が合つたリュウマの姿を見て苦笑しているお巡りさんに話を振つた。しかし、よく見るとそのお巡りさんも見覚えがあつ

た。

「よく見れば黒沢君じゃないか。君がリュウマ君を連れて来てくれたのか？」

「どうも、川添さん」

黒沢正義巡査長、四十五歳・妻子持ちで息子と共に川添道場に通う一人である。

「いや、別件でこの子と知り合ったんですがね」

そう言いながらリュウマに視線を向け苦笑いを絶やさない黒沢さん。

「交番に彼を連れていって話を聞いていたんですが、川添道場へ行きたいと言つことだつたので……ほらリュウマ君もいじけてないでほら立つー！」

黒沢さんはそう言つてリュウマのその赤い髪をポンポンと叩いた。その一人の姿を見たタマキ父はまた驚いていた。

「また随分…仲良くなってるね」

一人にそう言つと、いつの間にか機嫌が直つたのか先程の笑顔に戻っていたリュウマが口を開いた。

「交番で黒沢のおっちゃんと話してたら、この間にか仲良くなつてもつて」

ハハハツと明るく笑っていたリュウマにちられてか、タマキ父も苦笑混じりに笑っていた。

「まあ、何もなくて何よりだ」

そう言いながら三人は話を弾ませていく。しかし、一瞬で完全に存在を忘れられていた坂口さんが恐る恐る声を掛けた。

「あ、あの～よろしいですか？」

そう言つと三人は同時に顔を振り向かせた。タマキ父はすまなそうな顔して、リュウマは誰？という顔をしていた。

「すみません坂口さん、話に夢中になってしまって」

恐縮そう言つタマキ父を見て坂口さんはいえいえと手を振つていた。

「彼、さつま川添さんのこと先生と呼んでいたので気になつて……」

坂口さんの疑問にタマキ父はなるほどと頭き、その疑問を答えた。

「昔、リュウマ君もここに通つていたんですよ。だから私のことを見先生と呼ぶんです」

簡潔に答えたタマキ父の言葉を聞き、納得したようでは坂口さんは頷いていた。すると、そう頷いていた坂口さんに唐突に下から声を掛けってきた人物がいた。

「おひちやんも剣道するなんか？」

その声にゾクッと身を震わせた坂口さんは、下をゆっくりと見るとそこには、しゃがみ込んで地面に置いてあった剣道具をポンポンと叩いていたリュウマがいた。驚いている坂口さんを無視してリュウマは、言葉を続けた。

「おひちゃん、強いんか？」

「なあ～？」と聞いてきた所で、坂口さんはハツとして頷いてみせた。そこで、傍らで呆然としていたタマキ父も復活し口を開いた。

「坂口さんは有段者だから強いよ、リュウマ君」

そう聞くや、リュウマは目をキラキラと輝かしていたが、次にうんと唸つて何か考えていた。そして、結論が出たのかリュウマは「よし」と頷き、言葉を発した。

「よしー。おひちゃん、試合じょか！」

「」「はー?」「」

リュウマのその一言で坂口さんは勿論、タマキ父も傍観していた黒沢さんさえも聞き返していくた。

「いや、だから試合。おひちゃん強いんぢゃー。やつたらじょりゅう笑顔で坂口さんこそひと言ひっこむと見て、タマキ父は遠慮がちに声を掛けた。

「で、でもリュウマ君。君このあと編入手続きをして学校に行くんじゅ?」

そう、リュウマはこの町に引越しして来たため、学校の編入手続きをこのあとしに行く予定だった。しかし、リュウマは笑顔で大丈夫と言っている。

「時間もまだあるし、それに自分にはコイツがあるし」

リュウマの指差す先にはシルバーのボディーが輝くバイクが止まっていた。バイクからリュウマへと視線を戻すタマキ父は何処か諦めたような顔して、坂口さんに顔を向けた。

「すみませんが、宜しいですか？　こつなると聞かない子として」

「別に良いですよ。何、私が稽古をつけてあげますよ。あ～はっは
つはっ！！！」

「負けまへん！　先生、道具一式お借りしますね～」

坂口さんは笑いながらリュウマと共に道場へと入つていった。有段者である坂口さんはリュウマを見てこつ思つたのだろう、『ガタイは良いが有段者である私が早々に負けるはずもない！』と。その油断が命取りとも知らずに……

「じゃあ、ひょっと学校の方に行つてきます」

そう言いながらリュウマは、バイクの独特的エンジン音を響かせながらヘルメットを被つていた。

「ああ、こつてらっしゃい。 気をつけてな……ああそれと、もしかしたら学校でタマキに会うかもしれんから」

「ホンマですか!? では、行つてきます!—」

タマキ父が言い終わる前にリュウマは、バイクを物凄いスピードでとばし直ぐに見えなくなった。

しかし……。

「室江高つてどっちですか?」

直ぐに帰つてきた。室江高の場所を聞くと先程と同じように、猛スピードで走り去つた。

「まったく、忙しい子だな

バイクが走り去つた方向を見据えながら微笑んでいたタマキ父は、それでと一言駄々道場の中に入つていった。

「……大丈夫ですか？ 坂口さん」

タマキ父は、道場の中にいる坂口さんに喋り掛けた。坂口さんは、面を外し腰が抜けたようにペタンと座り込んでいる状態で、顔は呆然としていた。だが坂口さんはゆっくりとタマキ父の方を向き、口を開いた。

「……あの子、何者です？ あんなの反則級ですよ……。雰囲気なんて、剣道している時のタマちゃんに似てましたけど…………いや、どちらかと言うと…………」

ブツブツと一人言のように呟いている坂口さんを見て、タマキ父も先程の試合を思い返しながらその感想を坂口さんにも聞こえるぐらいの声で呟いた。

「……私も、リュウマ君の試合を見るのは久しぶりだったが……随分と、いや……とても強くなっていたな。流石、母さんが椿が見込んだ子……と言つべきかな」

タマキ父の言葉に坂口さんは直ぐさま反応し、驚いていた。

「椿ちゃんがですか！？」

「ええ、リュウマ君大分氣に入られてましたし……母さんにもそして、タマキにも……」

その言葉を聞いて坂口さんは、ハアと言いながら黙つて聞いていた。

そして、道場にいる二人は同時にバイクに乗り赤い髪たなびかせる青年の姿を思い返していた。

第2話・到着！川添道場！出発！室江高校！（後書き）

次回はやっと、室江高が舞台です。あのキャラ達をやっと出せる…
…では次回も

「なあ？」

なに？今忙しいんだけど。

「いや、素朴な質問なんやナビ…黒沢のおひがいやんぢにこつたん?
途中で消えたけど」

仕事中だからって、帰つたけど……

「ふ～ん、じゃあなんでその場面書いてへんの？」

……………では次回もお楽しみに～。評価・感想も待つて
ま～す～

「忘れとつたな…」

第3話・玉盆こと衝撃の再会（前書き）

今回は、案外早めに仕上がりました！自分で驚きです。興味があれば見てやって下さい。

第3話・出でこと衝撃の再会

えへ、どうも～赤髪青年」とコウマです。川添道場から、バイクをかつ飛ばして室江高に到着したんは良いんやけど……

「職員室つて、どうせひやう？」

現在、校舎の中をさ迷つてゐるわけで。まあ今回は、周りに生徒もおるし聞けば分かるやううと思つて近くにおつた男子生徒に声かけたんやけど……。

「あの～、すんません」

「！……」

田合わした瞬間に顔逸らして、物凄い勢いで歩いて行きよつた……。

俺、何かしたつけ?つと言つたか、さつきから何人かに声掛けとるけど全員同じ反応やねんけど。あつ！でも、男子と女子やつたら微妙に反応が違つとつたな。男子は直ぐさま顔逸らしてどつか行くのに、女子の場合は顔合つた瞬間しばらくじつち見とつたと思つたら、顔少し赤くしてキャーとかいつて走つていつたつけ。……やっぱり、この赤髪で爽やかな笑顔があかんのか？

「あの～、どうしたんですか？ つちの学校に何か御用ですか？」

コウマがどうしたものかと、頭を悩ましていると後ろから声が掛かった。振り向くと、やけに丸眼鏡と泣きボクロが印象的な少女が立っていた。

「いや、職員室に行きたいんやけど、わからんで」

さうリュウマが用件を答えると、泣きボクロの少女はじつといひちらを見て軽く頷いた。

「……分かりました。それじゃ、私が案内しましちゃうか？」

「えつー？ 良いんか？」

「はい！ それくらいお安い御用です！」

リュウマは思つた。面倒見の良い子だな。

「じゃあ、じつちでー！ キヤーーー！」

泣きボクロの少女は、見事なまでに転んだ。それも、なにもない所で頭から綺麗に滑り込んでいた。

「いたた、また転んでしまつた

リュウマは、苦笑いしながら頭を摩つてている少女に手を差し延べた。

「大丈夫か？ ……えーと」

リュウマは、その少女の名前を呼ばうとしたが聞いていないのに気付き言葉が詰まつた。その様子を見た少女も、そのことに気付き頭を摩り続けながら答えた。

「東……東聰莉です」

「スメラギワウダ
皇龍真や。ヨロシク」

その後、一人で職員室へ向かったのだが、向かう最中サトリーは何度もなにもない所で転んでいた。リュウマの中でサトリーの印象にドジッ子がプラスされたのだった。

「では、これで編入手続きと連絡事項は終了です。他に何か聞きたいことはありますか？」

サトリーと共に無事？職員室に着いたリュウマは、案内してもらつたサトリーに軽く礼を言い、別れ今は編入手続きを終えて制服や教科書といった支給品の連絡事項を聞いた後だった。

「いえ、特に……あつ、出来れば剣道部の場所教えてもらえば」

「剣道部？　あ～、それだったら丁度顧問の先生いるから。石田先生？」

「…………」

編入手続きをしていた先生が、顧問の石田先生なる人を呼ぶが一向に返事は返つてこない。すると、一人が視線を向けている方とは逆から声が掛かつた。

「石田先生なら、先程お手洗いに行きましたよ?」

その声に、視線を石田先生なる人の机に向けていた二人はぐるりと振り向いくとそこには、若い女性の先生が教材を持ちながら立っていた。

「吉河先生、そうですか石田先生今席外してるんですか?」

「どうしたんですか? 石田先生に何か用事か何かですか?」

吉河先生と呼ばれた女性の先生は、疑問に思つたのか聞き返してきた。

「いえ、この子が剣道部に行きたいと言つので石田先生に案内してもらおうと思つたんです……」

「この子?」

編入手続きをしていた先生から、視線をリュウマに向けて吉河先生はじつと見た。その視線を受けたリュウマは、自身も顔を吉河先生に向けてニコニコと笑い、もう一人の先生に視線を戻して口を開いた。

「いらっしゃらないんでしたら、別に良いです。学校見て回るつい

で、自分で探し出すの……ではこれで、失礼しました

リュウマはそのまま立つと、ゆっくりと立ち上がり出入口に向かい、一度軽く頭を下げて職員室を出ていった。

職員室から出でてきたリュウマは、笑顔だった顔を崩して、ブハーハーと息を吐き、大きく伸びをした。

「ん~！ 疲れた。まあ、先生の前では少しくらい真正面にしゃんとな……ただでさえ立つ髪やし~」

そう言いながら、自身の髪を指でこじくしながらリュウマはその場を後にした。

学校内を、ふりふりと回っていたリュウマは、意外にも直ぐに剣道部を見付けた。

「ここか？ そつまから竹刀の音じとるし

リュウマの言つ通りその場所、武道館と記された場所からパシイ、

パンとこう竹刀が出す独特的の音が響いていた。その音に釣られるようにリュウマは、武道館に入つていった。

リュウマは靴を脱ぎ、田を前に向けると剣道部の生徒が、一人の男子生徒がこちらに背を向けて剣道部の扉を開き立っていた。ゆつくりとその男子生徒の後ろに行き、リュウマは身長が自分より頭一個分低い、前にいる生徒のおかげで中の様子が伺えた。その中では、体格的にそして身長的に差がある一人が試合をしていた。

試合をしている大きい方（男子とリュウマは断定）は、小柄な方（こちらは女子と断定）を力で押し勝とうとしているが、小柄な方の女子はその一撃一撃を全て受け切っていた。

（お互い、経験者やな。普通やつたら、男子が勝つんやうつナビ…）

…

そう思つていた直後、間合いを取つていた男子が手に力を入れて竹刀を振り上げ相手に向かい、踏み込んだ。しかしその瞬間、女子の方は男子の振り上げた時に合わせ胴に打ち込んだ。その一撃を目にしたリュウマは、ただこつー言呟いた。

「「お見事」」

前にいた男子生徒と言葉が重なり、男子生徒の方は驚き後ろを振り向いた。見上げる形になつていてる男子生徒を見たりュウマは笑顔で挨拶をした。

「どうせ」

「どうせ」

「こんな所で見てやんと、中で見よつや」

男子生徒に、そう促したリュウマは背中を押して中に入つていった。そして、その男子生徒の横に移動して座り込み試合を見つめた。すると、横からリュウマに声が掛かつた。

「あの～、貴方誰ですか？」

そう声を掛けたのは、人懐っこい顔に長髪に見える大きなりボンをして、剣道部員なのだろう剣道着を着た少女がこちらに喋りかけてきた。リュウマは、くるりと顔を向けてその少女に「コリ」と笑つた。すると、少女は頬をポツと赤く染め上げた。

「俺？　俺、皇龍真。リュウマで良いで。ヨロシク～」

手をフラフラと横に振り、笑顔で挨拶を交わして後ろにいた三人にも笑顔で「ヨロシク～」と手を振つていた。すると、少女はハッと我に帰つたような顔をして直ぐさまリュウマの笑顔のお返しのようすに笑顔で元気良く挨拶を交わしてくれた。

「あ～、私は千葉紀梨乃。この剣道部の部長です。キリノで良いよ！　で、後ろにいるのがコージ君で可愛い子がミヤミヤ、で最後にダン君！」

キリノが、全員の紹介を済ませると二人共が軽く会釈した。すると、コージが疑問化にリュウマに喋り掛けってきた。

「え～っと、それでリュウマさんはどうしてここにっしー？」

リュウウマはこいつの間にか前を向き、試合を見ていた。そして顎に手を添えながら、 George の問いに答えた。

「ん？ あ～自分、今日ここに転校してきてな、その手続きにな

キリノ達は、リュウマの言葉を聞きへえーと頷いていた。

「そんなことより、アレ良いんか？ 仕切り直してへんナビ

「えー？ いら外山君ー？」

キリノが外山という男子に声を荒げるが、そんなもの聞こえていないというように攻め続ける。しばらくの攻めに耐えた相手の女子は、外山と間合いを空けた。その行動を見た外山は挑発するように声を掛けっていた。

「どうした、やつから。打ち込んでこよ、川添さん」

外山の発した人物の名にリュウマは一瞬、眉をひそめた。

(川添？ あいつ今、川添言つたような……)

リュウマは、この疑問に応えるだらうキリノ達へと声を向けた。

「なあ、もしかして……川添って、川添珠姫？」

外山に川添と呼ばれた少女をリュウマは指差しながら聞くと、 George は驚いたように聞き返してきた。

「そうですねえ、リュウマさんはタマちゃんのこと知ってるんです

か?」「

「へえ~、そつか…タマキやつたんか。それやつたら、この勝負…

…

ユージが、リュウマへと聞き返しているがリュウマはもう聞こえていないようで、顔は先程とは違う笑顔でブツブツと囁いてくる。

すると、試合に動きがあった。再度しけけようと、外山が踏み出す。だが、タマキは再び先程外山に打ち込んだ時と同じように面に一撃打ち込んだ。しかし、タマキはそこでは止まらなかつた。外山が振り向くのと同時に一撃!、そして切り返すように三撃田を繰り出した!。

タマキに連續で三撃も喰らつた外山は、しばらく固まっていたがゆっくり口を開いた。

「……で? 別に…痛くもなんともねえよ」

振り向き様に怒りを含みながらそう発する外山は、言い終えるとタマキに向けて力の限り打ち下ろした。だがその一撃さえもタマキは難無く受け止める。それを見た外山はタマキに向けて吠えながら打ち続けた。

「かなりやつてるみてーだな、んじゃ試合じや俺が敵うわけねえな!

!」

しかしタマキは外山が吠えるも、汗一つかかずにその一撃一撃を冷静に見極める。

「でもおめヒ弱ヒよ！ 効かねえよ！ そんな軽イの……！」

全てを受け切りながらタマキは後ろへ引いていくが、突然体勢を崩した。それを見た外山は、そのまま竹刀を振り下ろした。だがタマキは焦らずに竹刀を前に出し、振り下ろされた竹刀をしつかりと受け止めた。

「あらら？ タマちゃん口ケちゃつたよ」

コーディがタマキの姿を見てポツリと呟く。

「あひやー、やつぱり」

セウキリノが言つと、コーディは不思議そうな顔で見た。

「タマちゃんに合つ袴がなくつてさ、福踏ん付けちやうんだよ。あれじや」

その言葉を聞いたコーディは、納得したように頷いた。

「ああ、なるほど。どうでこまいち動きが悪いわけだ」

コーディがそう亥く中、外山は立ち上がったタマキを攻め続ける。そんな攻めにも全て受け切るタマキだが、やはり袴の福を踏んでしまつか少しよろめいている。そこに更に力を入れて攻めていく外山。その光景を見たキリノは、あうあうと言いながらうろたえる。

「力まかせに押してきたよ。危ないかな」

今まで、タマキ達の試合を見ていて一言も喋らなかつたりュウマは、そのキリノの様子を見て微笑を浮かべながら呟いていた。

「いやあ、大丈夫やる。 なあ、ゴージ君」

リュウマがさうゴージに話を振ると、ゴージは力強く頷いた。

「ええ、たいしたハンデじゃないでしょ」「う

そうゴージが言つや否や、武道館内にスパンと綺麗な胸に入る音が響いた。再び一本を取られた外山は、更に攻撃の一手を荒く振り下ろしていく。

しかし、外山も攻め疲れたのか攻撃の手を止めて間合いを空けた。その光景をさつきまでの笑顔とは違い、つまらなそうな顔して見つめていたリュウマがキリノに喋り掛けた。

「なあ部長サーン、そろそろ止めた方が良いと思つんやけど」

ピッと指を外山達の方をリュウマが指すと、キリノもその意味が分かつてゐるようで軽く頷き、「だね」と肯定を表す。更に、ゴージもまたその言葉の続きを言葉を漏らす。

「そうですね。外山先輩のために……」

「だね」と再び言葉を漏らしたキリノは意を決したように笑顔で外山とタマキに喋り掛けた。

「いやータマちゃん、外山くんお疲れさん。暑いね、疲れたねー。ここいらへんで一服いたしますかーー！ ほーら、花粉症に効くしそ

ジユースだよーーー！」

「…………」

「…………」

無言。というよりキリノ自身を一人は見ていない。無視されたせいか、キリノはしそジユースを持ったまま固まっている。更には、その空氣を読んでないようになに隣にいたダンが「俺、もらつていい?」と聞いてる始末だった。なにげにリュウマも便乗してしそジユースを貰っている。

リュウマとダンがしそジユースをチューチューと飲んでいると外山が先に動き、面を取りに行つた。一方のタマキは、冷静に何かを見極めている。そんなタマキの様子を見つめるリュウマは思った。

(何か、狙つとんな)

そう思ひのもつかの間、タマキは竹刀を突き出しながら力強く踏み出して相手の喉元を竹刀で、文字通り《突き》を繰り出した。

「アトミックファイヤーブレード…………」

その瞬間、リュウマはタマキにブレイバーが重なつて見え、ポツリと小さく呟いていた。

タマキの突きを喰らつた外山は、少し体が浮き仰向けに倒れこんだ。それに合わせるように入口の扉がガラリと開いた。そこから現れたのは、ネクタイをつけずにスーツを楽に着ている短髪の男性だった。

「あれ？」

短髪の男性がそう一言呟くと、壁にもたれ掛かっていたもう一人の男子生徒、岩佐が笑いながら倒れている外山に近づいていった。

「おいおい外山、負けちまつたなーーー！　はははは。コケてんじやねーよ、滑ったか？　ハテだなおい」

外山にそう言う岩佐だが、喋り掛けられた外山本人は一言も喋らず、面を外した顔も信じられないものを見たという顔で岩佐に立たされるが、何処か足元がおぼつかないようにならフラフラとしていた。そんな状態である外山は、一度タマキの方へと振り向くが岩佐に無理矢理引つ張られながら出ていった。唯一、この状況が分かっていない短髪の男性は不思議そうな顔をしている。

そんな中、キリノはタマキに近づいて懇願するような目で見つめた。

「タマちゃん。あの一人がまたいつかやって来るかもしれない……その時なんとかできるのはタマちゃん……あなただけなんです……！」

タマキはじつとその言葉を聞いていたが、その小さな口をゆっくりりと開いた。

「……分かりました。どのくらいかは分かりませんが…取り敢えずよろしくお願ひします」

ペコリと頭を軽く下げる、ワーゲンという歡喜の声がその場に響き渡った。短髪の男性だけは、何が起こっているのか分からず頭の

周りに疑問符を大量生産中だった。しかし、その歓喜に包まれた空間を断ち切る声があがつた。

「いやー、たすがタマキ。椿さんの娘やなー」

パンパンと拍手しながら立ち上がったリュウマは、ゆっくりとタマキに近づいていく。

「気迫とか、雰囲気がそつくりになってきてんなあ」

タマキは、母の名に反応してじっと近づいて来るリュウマを見据えている。キリノ達は、何がどういうことか分からず黙つて二人を見つめている。短髪の男性……まあ、もう紹介するのメンドイのでゴジローは、更に知らない人介入のおかげで情報が処理仕切れないのか、頭から煙が上がっている。

「久しぶりやなあ、タマキ！」

歩むスピードを少し上げて、腕を広げて抱きしめる体勢で近づいて来るリュウマを見ていたタマキは一言だけ呟いた。

ああ、今、感動の再会！――！

「あの、貴方…誰ですか？」

ズコツ――――――！

タマキの一言でリュウマはそのままタマキを通り過ぎ、頭から気持ちいいぐらいのヘッドスライディングをかましていた。しかもそのまま滑つていったので頭を壁にぶつけて、僅かに擦れた所からプ

スプスと煙が上がっている。

「だ、大丈夫ですか？ リュウマさん」

その場からピクリとも動かないリュウマを見て、コーディが心配そうに囁いた。すると、リュウマはのつそりと立ち上がりたと思つたら三角座りをして床にのの字を指でなぞり始めた。

「あ～、何か期待損？ 確かに少しばかり覚えてくれてたら嬉しいなあとは思つとつたけど、ここまでは忘れると……へこむわ～。ハア～、覚えとつたん俺だけ……」

ブツブツと呟いているリュウマを見ているキリノ達は、掛ける言葉が見つからず困惑していた。そんな中、横から声が掛かった。

「なあキリノ、この状況……説明してくれないか？」

いつの間に回復したのか、コジローはキリノの横に来てこの状況を聞いてきた。

「いやあ～、まあかくかくしかじかでして……」

「いやあ、キリノ先輩、ギャグ漫画じゃないんだから……ですがにそれは……。」

苦笑いしながらキリノの発言にツッコミを入れるコーディ。

「なるほど……ダンが外山にいびられてた所に丁度キリノと一緒にきたタマが居合わせて、そのことが気に入らなかつたタマが今だけ仮入部するといつてそこで、次にどサドの外山がタマに田をつけたが

逆にボロボロにされたと。…で、あそこで床にのの字を書いてる赤い髪の兄ちゃんが、今日転校してきて編入手続きをした皇龍真君だと……なるほど、そういうことか

「長ーー あの人言にそんなに集約されてたんですか？ って言つて通じるてるんですか！？ 先生」

コジローの言葉でシシコリを無視して話を続けていた。
入れるコージ。

「で？ どうすんだ？ アレ」

「コジローせりゆくマを指差しながらキリノに聞いていた。見ると、何故かダンに慰めてもらっている。

するとコウマは、すべつと立ち上がり何故か晴れやかな顔をしている。

「立直つた！？」

コージとコジローはこれまた綺麗にハモった。その横でキリノは「あははは」と笑っている。

そんな中、リュウマはタマキに再び近づいていった。

「まあ、落ち込んだつてしまはないな。俺とタマキが一緒にあつたん小さい頃やつたし」

そう言いながら自分の赤い髪をボリボリと搔いた。

「あの……」

タマキがなにか言おうとしたが、それよりも早くリュウマが口を開いた。

「まっ、そういう所もタマキらしくなんやナビな

ニラ、とタマキに向けて微笑み、右手をポンとタマキの頭に乗せて優しく撫でた。そのリュウマの髪は窓から入り込む陽光を受け、美しく輝いている。

「あつ……

リュウマのその行動を見たタマキは、今朝のあの懐かしい夢を思い出していた。自分が小さい頃、一緒に母から剣道を教えてもらっていた赤い髪の少年……。そしてそこではまつ毛ひとつタマキは思い出した。夢の中の少年の顔も、その名前も……。

「そう、それは……

「リュウマ……君?」 そう恥ぐタマキを見たリュウマは先程よりもにこやかな笑顔になりただ一言、力強く答えた。

「おつ……」

リュウマのその笑顔は、夕陽に照らされてかその場にいた皆が見とれる程に綺麗だった。

タマキもその笑顔を受け、頬を少し赤らめていた。ついでに言つ
とその影でキリノも再度、顔を赤らめていた。

今、西よりきた一陣の風が室江高剣道部に吹いた瞬間であつた。

第3話…出でこと衝撃の再会（後書き）

「えへ、どうも今回でやつとフルネームで出してもらひた皇龍真二
ヒコウマです。何故頭から自分が出てるかってこと、今回頑
張り過ぎて隣で死んだる作者の代わりに進行させさせてもらひます。」

「と書くわけでも今回はタマキに来てもらってまへす」

「ど、どうも…川添珠姫です」

「こやあ、今回タマキは格好良かつたなあ～」

「いえ、そんな」

「特に最後の突きーあれはまさ」「ブレイバーそのものやつたなあ」

「そ、そうですか？」

「ああ、今思い出しても惚れてしまいそうなくらい格好良かつたわ。
ヒコーソんなタマキには俺の恋の籠ったほお擦りをプレゼンツぐふ
おばた」

「だ、大丈夫でしょうか？」

「クッ」

「なら言ひですナビ…え？ これを読めば良いくんですか？」

「クッ クッ

「分かりました、作者さんの「」なら……ではいきます。今回の
お話しはいかがだったでしょうか？ 評価、感想お待ちしています。
次回も期待に応えられれば幸いです。それではまた次回でお会いし
ましょう。ちょうどなり……ペコリ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3406d/>

バンブーブレード～西からの赤い風～

2010年10月14日16時35分発行